

ニューガラスフォーラムの今後に期待して



通商産業省生活産業局長
浜岡平一

ニューガラスフォーラムが、昨年7月に設立されて以来、セミナーの開催をはじめ、ニューガラスに係る技術的取りまとめ等の積極的な活動に加えて、ここに機関誌「NEW GLASS」が創刊されることに対し、心からお慶び申し上げます。

ガラスは、四千年あるいは五千年ともいわれる遠い昔から、我々の生活に密接に関わってきた生活材料であります。我が国とガラスとのかかわり合いを考えると、正倉院にさかのぼれば瑠璃、玻璃に、南蛮文化時代にはギヤマン、ビードロといわれ、明治以降はガラスとして、広く国民生活に定着してきました。

さらにガラスは、建築材料のみならず、メガネ、望遠鏡等に代表されるような機能材料として、人類の文化及び科学の向上にも測り知れない貢献をしてきました。

今日、産業の最も新しい流れとして、メカトロニクスの波に加え、オプトエレクトロニクス、バイオテクノロジー等の新しい流れが生まれてきており、これに呼応して新しい機能をもったニューガラスが有望な新素材として、一層注目を集めるようになってきています。

このニューガラスの新しい流れを背景に、産学官が一体となって設立されたニューガラスフォーラムは、世界的にみても例のない画期的な集団であり、また外国企業の参加の下、国際的な技術交流等を促進することは、我が国における技術力の向上ばかりでなく、国際協調という面からも、大いに意義のあるものと考えております。

現在のところ、同フォーラムでは、ニューガラスに関するシーズ、ニーズ、研究課題等につき、鋭意調査検討が行われておりますが、当省といたしましても、ニューガラス産業の振興に向け、これらの活動を積極的に支援していきたいと考えております。

ニューガラスが新しい機能材料、構造材料として、情報産業、光産業、バイオ産業等へと展開して、従来の技術体系に大きな影響を及ぼし、さらに生活文化の向上に貢献されることを大いに期待しております。

最後に、本フォーラムの活動が21世紀の新しい産業を生み出すための大なる革新運動として成功されますことを祈念いたしまして、私のご挨拶といたします。

ニューガラスフォーラムの設立とニューガラス創刊号の発刊にあたって



通商産業省・窯業建材課長
和田正武

昨年7月にニューガラスフォーラムが設立されて以来、ニューガラスに関する調査・提言をは

じめ、セミナーの開催等、活発な活動が行なわれておりますが、今般、同フォーラム会員の皆様の

念願でありましたところの機関誌の創刊に至りましたことは、会員皆様への情報の浸透、知識の普及をはじめ、今後の事業活動の一層の展開を推進する上で、大変喜ばしいことと考えております。

ご承知のとおり、昨今の我が国産業界をめぐる情勢は、国内的には景気の先行き不透明感、国際的には貿易摩擦問題等により、一段と厳しさを増す状況にあります。このため産業界にとっては、これらの課題に対応可能な安定的基盤づくりを一層促進することが必要であると考えております。

振り返ってみますと、我が国産業界は、欧米諸国からの基本技術の導入とその応用を基調として発展を遂げてきた面が多く、ガラス産業もその例外ではありません。我が国の産業界が将来にわたり安定化するためには、先端的分野を含めて基礎技術力を高めることが重要な要件であると思っております。

ガラスは窓ガラス、レンズ、びん、食器等の我々の身近な生活を支えてきましたが、新しい技術開発の流れとして、光ファイバーに代表されるように、ガラスがさまざまな分野の新素材としての可能性を増してきています。これらのニューガラス

は、オプトエレクトロニクス、バイオ産業等、多面的な用途が期待されており、21世紀には既存のガラス産業の市場規模に匹敵ないしこれを凌駕するまでの成長が見込まれている等、大きな期待をかけているところであります。

一方で、ニューガラスの開発は、極めて基礎的、先端的性質が強く、技術開発を効率的に進めていくためには、技術交流や研究テーマの共同探究、欧米先進諸国との連携等、幅の広い活動も必要であろうと考えられます。

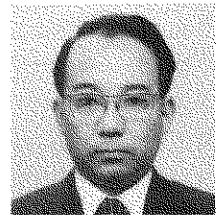
ニューガラスフォーラムは、発足2年目を迎え、活動の一層の充実と拡大が期待されますが、通産省としても、同フォーラムの活動を支援するとともに、ニューガラスに関する産業の振興や、国際協力の推進について、政策の展開も考えていきたいと思っております。

最後になりましたが、ニューガラスフォーラムに参加されておられます企業・大学・国立研究機関の皆様のご活躍を期待するとともに、フォーラムの益々のご発展を祈念いたしまして、私のお祝いの言葉といたします。

「ニューガラス」創刊号祝辞

ニューガラスフォーラムの設立並びに機関誌「NEW GLASS」の創刊にあたり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

今や我が国の技術水準は、多くの分野において世界のフロントランナーとなったと申しても過言ではありません。これからは、我が国が先端技術分野において積極的に研究開発を推進し、世界の技術フロンティアの拡大に貢献していくことが最近の我が国にとって困難な国際情勢を乗り越えるためばかりではなく、全世界的な経済発展におい



工業技術院技術審議官
坂倉省吾

ても重要なことと申せましょう。

ますます高度化する先端技術分野の研究開発において、新しい素材の開発は大きな研究課題となっております。ガラスは、人間生活にとって必要欠くべからざる基本的な素材として従来から多く使われてまいりました。近年、従来のガラスとは製造方法、組成、性質、機能等の面で根本的に異なったニューガラスが目ざされつつあります。ニューガラスは、その組成を変えることにより様々な性質を付与することができ、その応用範囲も人工歯

祝 辞

根などの生体材料、電気材料、磁性材料として、また、多孔質フィルターなどの化学的応用、機械などの構造材としての応用など多方面にわたっております。このような有用な素材であるニューガラスに関する産学官の研究者、技術者の交流を通じて、情報の交流、意見の集約を図り、ニューガラスの可能性を探究するとともに、所要の提言を行ってニューガラスの発展と地位の向上を図ることを目的としてニューガラスフォーラムを結成したことは誠に意義深く、さらに昭和61年度からは機関誌を発行するなど活動を充実させる事に対し深く敬意を表する次第です。

工業技術院といたしましても、先端技術の研究開発、とりわけ新素材に関する研究開発は、ますます重要になるであろうという認識のもと、厳し

い財政事情の中ではありますが、様々なプロジェクトにおきましてその研究開発を推進しているところであります。また、昭和60年度には基盤技術研究促進センターを発足させ、先端基盤技術の研究開発において民間活力を最大限に引き出すための環境整備を行ってまいりました。

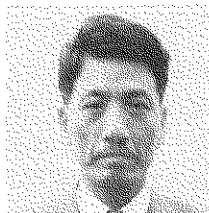
本フォーラムにおいて、これらの技術開発制度に適するような画期的な技術開発のシーズを見出されることを期待しております。

最後に、これまで本フォーラムの設立に、またその後の体制整備に力を尽くしてこられました皆様方に敬意を表しますとともに、ますますの御発展をお祈り申し上げまして私のお祝いの言葉いたします。

NEW GLASS の発刊を祝して

大阪工業技術試験所長
(ニューガラスフォーラム世話人)

速水諒三



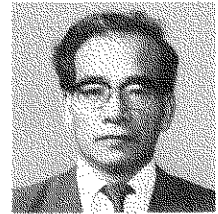
大工試の名前はかってガラスの研究の象徴として知られ、研究内容が随分様変わりしてからも、大工試といえばガラスということで、いろいろと得をしたり、時には過大な期待をされたり、つまりは親の七光のおかげを蒙って来ました。栄光は、磨かれておればハレー彗星の影を映したであろう2メートルの反射鏡素材を始め、所内に点在する光学ガラスのブロックに名残を留め、これらかつてのニューガラスたちも、今はガラス研究の歴史の証人に変身しています。現HOYAの泉谷さんが大工試に居られた時の新種光学ガラス以降も、結晶化ガラス、多孔質ガラス、フォトクロミックガラス、レーザー発振ガラスとそれなりにニューガラスを追って来ましたが、今や親（あるいは祖父または曾祖父）の時代のように参らず、研究者は減るわ、ガラス工場の職員はゼロになるわで、

状況は悪くなる一方、何とか折角の七光がほやけなように懸命の努力を続けているところです。

この時期にニューガラス・フォーラムが発足し、更に新しい雑誌「NEW GLASS」が発刊されるということは、われわれにとって誠に心強く、喜ばしい限りです。フォーラムと機関誌の発展はもとより、そこから生まれる大きな成果に対しても、ニューガラスの研究に携わるわれわれ一同、懸命の協力を惜しまぬ覚悟しております。

ニューガラス発刊によせて

京都大学教授
(企画推進会議座長)
作花 濟夫



“ニューガラス”第1号の発刊おめでとうございます。ニューガラスフォーラムは昨年7月16日に発足し、それ以来、セミナー活動、調査活動、広報活動を活発に進めて参りましたが、2年目に入ってこのたび機関誌が発行される運びになりましたことは、フォーラムの前進の大きな一歩が印されたことになり、誠にご同慶にたえません。

“ニューガラス”はニューガラスフォーラムの象徴であるとともに会員の糧となるものであります。会員の皆様には、折にふれて、ニューガラスとは何か、ニューガラスフォーラムは何を目標とし、どんな活動を行っているか、ニューガラスに関してどんなニュースがあるかを知っていただき、その上で有効な提案をしていただく土台としてご利用いただけるものと確信致します。

実質的で重要な記事のひとつとして、セミナー

の講師の先生方の御講演の内容が掲載されております。これはニューガラスの勉強をするための恰好の資料となることに疑いの余地はありません。ニューガラスおよび関連材料の科学技術の現状と将来への展望が記されておりますが、活字になりますときには、どうしても正確さを期す関係上現状に重点がおかれるのが常ではないかと思えます。従いまして、現状を知るとともに活字の向うにある将来の新しいニューガラスの姿を私達会員自身が考え出し、造り出していくために活用させていただくことが大切かと存じます。

機関誌“ニューガラス”の発行は関係会員ならびに事務局の皆様の熱意と寺井良平委員長はじめ編集委員会の皆様の御努力の賜物であります。厚く御礼申し上げます。